

モイモイのモイ

(一歩一歩のたった一歩)



昨年12月に開催されたクライミング・コンペティション「Angkor Cup」で、スピーチするウン・シレイディ氏(机の左端)、中央に座っているのが僕、右端がクメール語と日本語の通訳のヒアさん。



NGO・Angkor Climbers Net のカンボジア側リーダーであるスムロンは、シェムリアップ市内中学校の体育教師だ。内戦後復興期のカンボジアでは、体育、音楽、美術など、賃金を得る仕事に直結しない科目は、これまで学校も家庭も重視してこなかったと嘆く。

平和を作る原理

2013年現在(3月)、シェムリアップ。5日間続いた記録的な大停電のあと、ウン・シレイディ氏(※)から、朝食ミーティングの要請があった。彼は超多忙でなかなかピンポイントの آپを取るのが困難なこともあって、驚きとともに僕は最優先でOKの返事をした。当日の朝、スムロンと通訳のヒアさん

を伴って、指定されたレストランで、僕は氏の向かいに座った。幾つかの報告のあと、氏は僕にこう言った。「外国人の貴方が、なぜこんな大変なプロジェクトを私たちのために引き受けるのか」

「岳人」に連載の機会をいただいたとき、そして「登山時報」にも同様の機会を得ている現在、数人の知人友人から意見ももらった。しかし、ストレートに僕の行動になぜ、と聞いてきたひとは、これまでひとりもいなかった。殆どは好意的な評価をしてくれたが、こんな意見も

目指せ、アンコールクライマー誕生!!

あった。クライミングなんて道楽より、もっと大事なことがあるでしょう、とか、東北はどうなの、母国が大変なのにアンタは外国で何をやってるの、とか、親が同意しないのに子供にクライミングなんか余計なお世話じゃん、とかとか。

文章を書く、という作業は僕にとつて考えることと同義だ。概ね僕は直感的に物事を進め、その行動を振り返って書き、書きながら考える。ちょうど文章を推敲するように。だから連載の機会をいただいたのはとても幸運だと思う。そうして得た認識の一つを、意見をくれた友人への答えになるかどうか自信はないけれど、ここに紹介する。僕はウン・シレイディ氏にこう答えた。

「この国に来てクライミングをすることですムロン先生と出会いました。何かとても大きな意志みたいなものによつて、たまたま。日本ではこれを『縁』といいます。私の母は『縁

を大事にするように私に教えました。そして、人工壁の計画が持ち上がったとき、スムロン先生にクライミングについて聞くと、先生はこう答えました。「スポーツは子供を良く育てる。この国の子供たちには、もっとスポーツが必要だと思う。君がここでクライミングを教えるなら無論、僕もやる」

彼の言葉は私の心の底に響きました。子供たちの健全な育成は、国力を生むと思います。国力は平和を作る、カンボジアの平和はアジアの平和、日本の平和、世界の平和へとつながって行くと思います。だから、縁は平和を作る最小単位であり、そこには平和を作る原理が埋め込まれている、私はそう考えています。

氏は黙って頷き、立ち上がりテーブルを廻って、僕に得意の下半身グリグリ攻めのさば折ハグをしてきた(この「技」は、連載7号<本誌2012年7月号>にも詳しい)。テーブルと椅子に挟まれた僕は、返し技の一つも出せず、思わず吹き出す以外になす術もなかった。

(続く)

(※) ウン・シレイディ氏は、前号も含めてすでに何度か本連載中に登場しているCCF(カンボジア・クライミング連盟)及び、シェムリアップ州教育・青年・スポーツ局のトップである